

前置詞句を伴う英語所有文のトピック構文的解釈

大西美穂

名古屋大学大学院

The 'have' construction in examples such as "*the table has a map on it*", which has a locative prepositional phrase co-referential with the subject, has been pointed out to have an extra syntactic argument. The present paper accounts for this problem from the perspective of information structure, claiming that this construction possesses characteristics of the topic construction. Contrastive study of the basic structures of Japanese and English and grammaticalization studies suggest that the subject NP of this construction functions as the topic of the sentence. Analysis of this construction by the cognitive reference point model also accounts for the topical characteristics of the subject, and furthermore, reveals the propositional nature of the predicate in this construction.

キーワード： 叙述の種類、トピック構文、Have 構文、参照点構造、多義性

1. はじめに

文や談話におけるトピック (topic) の概念は語用論においてこれまで様々な観点から多く論じられてきたが、本稿では、トピックが明示的に表現されない構文を取り上げ、そのトピック解釈の意味を検討する。¹特にここでは(1)のように、無生物主語と同一指示の関係にある代名詞を含む英語所有文(以下「have 構文」と呼ぶ)を扱う。本稿の目的は、例文(1)のような無生物主語 *that table* と、これと同一指示の関係にある代名詞 *it* を含む英語所有文が、トピック構文の特徴を持つことを示すことにある。

(1) *That table has three books on it.* (Heine 1997: 191)

(1) は典型的な他動詞文を逸脱した構造を持っていると言われている。それは、この文

* 本稿は、2008年度日本英語学会春季フォーラム、2009年度日本語用論学会において発表した内容に加筆・修正を施したものである。

¹ ここでは、主題役割の“theme”との混乱を避けるため主題と呼ばず「トピック」とした。ただし引用文献が「主題」を使用している場合はそのまま引用した箇所もある。

で叙述される対象となる事象内には机と本があるのみであるにも関わらず、言語表現においては、動詞 *have* の項として *table* と *books* および前置詞句内に *it* が使われており、主語あるいは代名詞のいずれかが余剰的な項と分析されてきたからである。このような逸脱性は、Jackendoff (2002: 139) が指摘するところである。彼は、下に示す (2)、(3) の *have* 構文を挙げ、この2つは互いに言い換え可能であるとしている。

(2) *On the chair is a stain.*

(3) *The chair has a stain on it.*

(Jackendoff 2002: 139)

(3) は、(1) と同様、前置詞句内に主語と同一指示の代名詞が生じる例であり、動詞 *have* の統語的項が *the chair*, *a stain* および *it* の3つである。これに対し、(2) は *the chair* と *a stain* の2項のみである。Jackendoff (Ibid., pp.134-139) によれば、統語的項は意味的項の現れであり、統語的項の数については(4)のような一般化が成り立つ。

(4) The number of syntactic argument that a verb takes on any given occasion is equal to or fewer than the number of its semantic argument. (ある動詞が取る統語的項の数はいつでも、その意味的項の数に等しいか、それより少ない。)

(Ibid., p. 139: 日本語訳は以降特に断わらない限り筆者による)

しかし、(3) の文は(2)のように3項ではなく2項で表示できるため、(3) の *have* は余剰な統語的項を持つ (Ibid., p. 139)。Jackendoff はこの余剰性を、(4) の一般化の「例外」として扱っている。

本稿では、動詞 *have* の項構造の点からは矛盾を含む(1)や(3)のような構造を持つ *have* 構文を、項構造ではなく情報構造の観点から捉え直す。具体的には、この *have* 構文が、(5)のようなトピック構文と統語構造および意味構造の点で類似することを指摘し、統語的には余剰的に見える主語が、トピックの機能を果たしていることを主張する。²

(5) *This computer, I just can't get it to work.*

(Langacker 2008: 512)

本稿の構成は以下のとおりである。次の2節では、まず、叙述の基本的構文および、英語の *have* を用いた構文自体の持ついくつかの一般的な特徴について、先行研究に基づ

² Kumashiro and Langacker (2003) によれば、*have* 構文と、トピック構文の特徴を持つ日本語の二重主語構文とは、意味構造が類似しているという。また、Langacker (2008: 512-7, 2009: 48-50) は、(5)のように明示的なトピック構文を持ち、名詞句が代名詞によって照応(太字)をうける構文では、参照点能力が反映されていると分析している。さらに Langacker (2009: 47-49, 83) は、所有者、主語、トピック、代名詞の先行詞は、いずれも参照点として機能するという。しかし、いずれにおいても、英語のトピック構文と *have* 構文の構造的類似性についての指摘はされていない。

いて概観し、(1) のような前置詞句を伴う have 構文がトピック構文の特徴を持つことを指摘する。2.1 ではトピックと主語に関わる叙述の基本的な型を言語類型論の観点から捉えた研究を紹介する。2.2 では英語の have 構文と日本語のトピック構文(ハ-ガ構文)との対応を指摘する日英対照研究を取り上げる。2.3 では所有概念に関する文法化の研究を取り上げ、所有概念からトピック概念への意味変化が、類型論的にも通時的にも観察される現象であることを示す。次に3節では前置詞句を伴う have 構文が解釈的にトピック構文の特徴を持つという主張を、3つの観点からさらに深める。3.1 では日本語のトピック構文との対応で明らかにされた have 構文の持つ特徴を示す。3.2 では参照点構造のモデルを使って、動詞 have の意味の希薄化と明示的トピック構文的解釈との関連付けを示す。さらに、3.3 では談話におけるトピックの階層性という概念を用い、have 構文のトピック構文的解釈の動機付けを検証する。最後に4節でまとめと本研究の今後の展望を述べる。

2. 先行研究に基づく have 構文の特徴

2.1. 叙述の基本型に関する類型論的考察

叙述の基本的な言語構造は各言語で異なる。Li and Thompson (1976) は、「言語は主語、トピックのいずれの概念が優勢であるかによって文構築の方策が異なる可能性がある」(Ibid., p. 459) とし、それを、典型的に「主語-述語」の構造が優勢な言語 (subject-prominent language、以下「Sp 言語」と略す)、トピック-コメントの構造が優勢な言語 (topic-prominent language、以下「Tp 言語」と略す)、両者が同じ程度で存在する言語 (subject-prominent and topic-prominent language、以下「Sp and Tp 言語」と略す)、どちらにも属さない言語の4種類に分類ができるとしている。本稿で分析対象とする英語は Sp 言語に分類され、それと比較対照する日本語は Sp and Tp 言語に分類されている。この研究は、Sp 言語では主語-述語構造が基本型で、この基本型からトピック-コメント構造が派生する傾向にあり、Tp 言語では逆にトピック-コメント構造が基本型で、それから主語-述語構造が派生する傾向にあることを示唆している (Ibid., pp. 471-483)。

日本語を Sp and Tp 言語であるとした Li and Thompson の主張は、日本語の文構成の基本型に関する益岡 (2004) の考察と類似する。³ 益岡 (2004: 3-6) は、日本語は、属性叙述文と事象叙述文の2つから成り、属性叙述文はトピック-コメント構造 (つまり有題文) を、事象叙述文は主語-述語構造 (つまり無題文) を取るとしている。属性叙述とは、典

³ 益岡 (2004) は日本語を Tp 言語であると考えている。これは、Li and Thompson (1976) が日本語を Sp and Tp 言語と主張していることと異なる。ただし益岡は日本語の2つの基本型を提示しており、事実上、両者の主張に矛盾はないと考える。益岡は、さらに、2つの基本型のうち、属性叙述文の方をより基本的であると主張していると本稿では解釈する。

型的には「太郎は優しい」や「兵庫県立美術館は安藤忠雄が設計した建物だ」のような、形容詞述語文や名詞述語文を指す。属性叙述文は対象表示成分である「～は」という「主題」(topic)とそれに対する属性表示成分の「解説」(comment)の2つの部分から成る。一方、事象叙述文は、典型的には「太郎が笑った」のように、動詞述語とその項を持つ文である。事象叙述文が、「太郎は笑った」のように「は」でマークされると有標的となる。⁴

益岡(2004: 14-15)は、日本語では、属性叙述文が文構成の基本モデルになっているため、日本語はトピック-コメント構造を基本型とするTp言語であると主張する。そして、事象叙述文の主語が「は」でマークされてトピックになる現象は、事象叙述文が、基本型である属性叙述文の文構成に倣ったものであると述べている。また、英語のようなSp言語については、事象叙述文が文構成の基本モデルになっている可能性を指摘している(Ibid., p. 15)。これは、英語では、日本語とは逆に、属性叙述が事象叙述文の形式でなされる傾向にあることを示唆するものである。

以上、ここでは、各言語は叙述の基本的な型を持ち、一方の叙述の型は基本的な型からの「派生」表現として捉えることができると指摘する2つの研究を示した。これに基づき、以下では、have構文がトピックや属性を派生的に表す可能性があることを検討する。

2.2. 英語の have 構文と日本語のトピック構文

Have構文は典型的な事象叙述に留まらず広い範囲の解釈がなされる構文であるが、あくまでも他動詞の構造を持つ。以下では、他動詞文であるhave構文を日本語のトピック構文と比較してその特徴を検討する。

Have構文をはじめとする幅広い英語の他動詞文は、日本語では、トピック文として表示されることが多い。例えば、(6) a-cのような例においては、日本語では、「ハ-ガ」を用いたトピック文の形をとることが多い(西光2004: 120)。

(6) Have a ADJ N.

- a. She has a nice smile. (彼女は笑顔が素敵だ。)
- b. He has a good memory. (彼は記憶力がいい。)
- c. He has a strong arm. (彼は肩がいい。)

(西光 2004: 120-1)

⁴ この2種類の構造に現れるトピックの有標・無標の区別は、(益岡2004: 3-6)では以下のように説明される。まず、有題文(属性叙述/トピック-コメント構造)では、主題の存在は所与のもので、これに属性を付与するという文の内部的な事情から、この主題は「文内主題」(=無標的)である。無題文(事象叙述/主語-述語構造)では、文の内部的な動機によって与えられる主題は無いため、これが有題の形を取る場合、その主題は文外部の事情、つまり文を構成要素とする談話・テキストによって与えられる。これが「談話・テキスト主題」(=有標的)である。

Have 構文と日本語のハ-ガ構文との対応を指摘する先行研究は他にも見られる。⁵ 例えば西村 (2004) は、日本語の「二重主語構文」(ハ-ガ構文) に対応する英語の表現型は、複数の構文に振り分けることが可能であるとし、その4つ目に have 構文を挙げている。これによると、「全体-部分の関係が成立する場合、対応する英語表現では have を用いることが多い」(pp. 295-6) という。以下の (7)、(8)、(9) では、*I, He, Beer* と *feet, eyes, calories* の間にそれぞれそのような関係が見られる。

- (7) I have sore feet. (私は足が痛い。)
- (8) He has blue eyes. (彼は目が青い。)
- (9) Beer has a lot of calories. (ビールはカロリーが高い。)

(西村 2004: 295-6)

このような Have 構文の特徴は、上に示した西光 (Ibid.) も (6) で「ADJ N」と示しているように目的語が形容詞の修飾を受けており、この2つはそれ自体が主語と述語の関係にあるということである。この点に関して西村 (2004: 296) は、Langacker (1993) の参照点関係による分析に触れながら、以下のように述べている。⁶

Langacker は、このような have 構文は主語を目的語に対する参照点としての機能のみをほぼ純粹に担うもの——動詞 have は主語と目的語との間の参照点関係そのものを表す——と見ている。(中略) この場合の参照点主語とは要するに主題 (topic) が文法化されて主語になったものであり、目的語 (例えば「青い目」) は主述関係 (例えば「目が青い」) を圧縮したものであるから、(7)~(9) などと「私は足が痛い」、「彼は目が青い」、「ビールはカロリーが高い」などの二重主語構文との平行性は容易に見て取れよう。(西村 2004: 296)⁷

⁵ 「ハ-ガ構文」を「二重主語構文」と呼ぶ先行研究もあるが、Kumashiro and Langacker (2003) が扱う「ガ-ガ構文」(単文) と区別する目的で「ハ-ガ構文」と表記する。

⁶ 参照点能力 (reference point ability) とは、Langacker (2009: 46) によると「捉えている一つの存在を通して、他の存在に心的に接触する能力」である。なお、参照点による分析については、3.2 で詳しく述べる。

⁷ 西村 (2004: 295-6) がこの構文の目的語は「主述関係を圧縮したもの」と述べているのに対して、中右 (1998: 91-2) は、ある種の have 構文は「複文構造」と述べている。中右 (Ibid., pp. 91-106) が取り上げているのは、本稿の分析対象である *The table has a map on it* (p. 91) のような前置詞句を伴う have 構文で、この動詞 *have* は目的語補文を取り、この補文が小節の内部構造を備えるという複文構造になっているとしている。そして、この項 (*the table*) には、*on it* によって *map* と関連付けられることによって、*map* とかわかりを持つ経験者としての意味役割が付与されるという分析をしている (pp. 91-94)。この分析は、1 節で見た Jackendoff (2002) による「項の数の一般化の例外」という問題への、一つの解決となる説明と見ることができる。

このように have 構文は、日本語では「ハ-ガ」を用いたトピック文として表示されることが多い。ここでは、これに基づき、have 構文がトピック構文的に解釈される際の2つの特徴を示した。一つは、have 構文の主語と目的語の間には全体-部分関係があることである。二つ目は、その目的語の名詞句は名詞と形容詞の間の主述関係を圧縮したものであるという点である。

2.3. 所有文の意味拡張と have 構文の多義性

Oxford English Dictionary (OED) では、have の原義は 'to hold (in hand)' (「(手に) 持つ」) であり、ここから 'hold in possession' (「所有する」) の意味に移り変わったとしている。一方、Langacker (2009: 82) によれば、現代のプロトタイプの意味は、所有 (ownership)、親族 (kinship)、全体-部分 (whole/part) の関係を表すもので、なかでも所有が最も中心的であるという。実際、出現頻度順の語義配列をしている COBUILD 英英辞典においては、「物の所有」と「属性の所有」が第一義として挙げられている。このように、いずれにおいても、have には、特にトピック的な意味づけがされていない。しかし、場所を表す前置詞句の補部に(無生物の)主語と同一指示の代名詞が生じる have 構文はトピック構文と構造的に類似しており、解釈においても、主語が目的語に対する参照点(トピック)としての機能を担う。本節では、Heine (1997) の類型論的・通時的研究を取り上げ、意味拡張という観点から、この類似性を検討する。特にここでは、様々な have 構文は、全体として、その意味構造において、トピック構文と類似する特徴を持ち、これが動機となって動詞の項構造では説明できない(1)や(3)のような構造が派生的に可能になったことを示す。⁸

Heine (1997) は所有概念を表示するために使われる構文が、場所存在文であったり、移動の着点を示す表現であったりするなど、各言語で異なることに注目した。彼は、所有概念を表すそれぞれの構文を起点スキーマ (source schema) からの派生による文法化(ターゲット)と考え、その文法化の多様性の類型論的一般化を試みている。⁹ この分析に使われる起点スキーマには、「行為」(Action)、「場所」(Location)、「随伴」(Companion)、「属格」(Genitive)、「着点」(Goal)、「起点」(Source)、「トピック」(Topic)、「等価」(Equation) の8種類がある (Ibid., pp. 46-7)。

英語の have 構文は行為スキーマ (take や seize など語彙的述語による X takes Y の構文スキーマ) からの派生とされる (Ibid., p. 231)。一方多くの他の言語の通時的変化の筋書きについては、例えばロシア語の所有文はもともと場所スキーマ (Y is located at X) を

⁸ なお、この類似性については、3.1 で意味拡張の観点から、さらに論じる。

⁹ また Heine (1997: 82) は、ソースからターゲットへの変化は、その中間段階で両者が共時的に共存する段階があり多義現象として観察できることも述べている。

基盤とし (Ibid., pp. 50-53)、ルイセーニョ語の二重主語構文を使った所有概念は、トピックスキーマ (As for X, (X's) Y exists) の構文を基盤として表示されるとしている (Ibid., pp. 114-7)。

上で示したように、Heine は英語の have 構文が現在も他動詞文の構造を持つ根拠を、行為スキーマからの文法化にあるとしている。この分析に基づいて、現在の have 構文の多義性に関して言えることは、他動詞文である have 構文が行為スキーマで解釈される場合は、形式と意味にずれがなく、他動詞文の構造 (形式) と行為スキーマ (意味概念) とが最も一致するが、他のスキーマで解釈される場合には、形式と意味にずれが生じるということである。つまり、英語で have 構文が利用される概念であっても、他の言語では他動詞文を用いないでこの概念を表しうるということになる。この点について、Heine (Ibid., pp. 33-35) は、このような所有概念の広がり以下に 7 種類に分類している。例文から分かるように、英語では 7 種類すべてに have 構文が対応している。

1. Physical possession: I want to fill in this form; do you have a pen?
2. Temporary possession: I have a car that I used to go to the office but it belongs to Judy.
3. Permanent possession: Judy has a car but I use it all the time.
4. Inalienable possession: I have blue eyes.
5. Abstract possession: He has no time./ no mercy.
6. Inanimate inalienable possession: That tree has few branches.
7. Inanimate alienable possession: That tree has crows on it.

(Heine 1997: 34-35)

上の例文を他動性の観点から検討すると、1. と 2. は行為性が高く、3. は所有概念を強く表示している。4. と 6. は状態性が高いが、所有概念から遠ざかる。3. を基点に上方向に向かうに従い他動詞文的な意味が顕著になり、下方向に向かって存在文的意味が顕著になっている。¹⁰ 7. は本稿で問題にしているタイプで、行為ではなく、一時的な場所を叙述するに過ぎないため、最も have 構文を利用する動機が弱い。この構文で表される概念は、have 構文ではなく、*There are (some) crows on that tree.*、*On that tree are (some) crows.*、*(Some) crows are on that tree.* のような存在文で表示できる概念として捉えることができる。つまり、7. は、他動詞文の項構造を素直に利用していない構造であることが分かる。

以上ここでは、英語の have 構文を行為スキーマからの文法化として分析する Heine

¹⁰ なお、5 の抽象的所有については、本稿の目的を超えるため扱わない。

(1997) の分析に従い、他動詞構文としての have 構文の統語的特徴とその意味構造の多義性を示した。そして、このような所有概念に関連する文法化の言語現象は類型論的にも通時的な意味変化の点からも起こりうる現象であることを確認した。また、そのような多義的な現象については、他動性という観点からも検討した。

3. Have 構文の多義化の動機付けとトピック構文化についての考察

3.1. ハーガ構文との比較から捉えた have 構文のトピック構文的解釈

2.2 では、トピック構文である日本語のハーガ構文と対応する英語の have の構文には、2つの特徴があることを示した。その1つは、目的語の名詞に名詞修飾表現を必要とすること、もう1つは、主語と目的語の名詞との間に全体-部分の意味関係があることであった。本稿で考察する have 構文は前置詞句を伴うもので、明示的にはそのいずれの特徴も持っていないが、両者の間に類似点が無いわけではない。本節では2節での検討に基づき、前置詞句を伴う have 構文もこのようなトピック構文的特徴を持つことを論じる。

まずは、前置詞句を伴う have 構文の名詞句の修飾表現について検討する。上で示した(6)~(9)の例では have 構文の目的語に生じる名詞句の主名詞を他の要素が修飾し、特徴付けすることで意味が生じている。つまり、目的語の名詞が詳述されることで、主語が特徴付けされることになる。例えば(8)の *blue* を外し “?He has eyes.” とした場合、文構造の点では問題がないが、(人には目があることは当然であることから) 主語 *he* の特徴付けにならず、意味解釈の面では容認度が下がる。一方、本稿で問題にしている(1)や(3)の have 構文の目的語の名詞には名詞修飾表現が使われていない。しかし、目的語の主名詞は前置詞句によってその場所が特定されており、そのことが主語への特徴付けに結びついている。これは、前置詞句が名詞修飾表現に相当する機能を果たしていることを示すものであり、この点で、have 構文はハーガ構文に対応する特徴を備えていると言える。

次に、ここで扱う(1)や(3)の have 構文には、ハーガ構文に見られるような明示的な全体-部分の関係はないが、主語と代名詞を伴う前置詞句の間にはそれと類似する関係がみられるという点について、まず(10)、(11)を例に説明する。(10)では、*the desk* と *drawers* が全体-部分関係にある。一方、(11)では、*Sue's trousers* と *grass* それ自体には全体-部分関係がなく、前置詞句が必須となる。

(10) The desk has three drawers.

(11) Sue's trousers had grass on them.

(中右 1997: 96)

この(11)の *Sue's trousers* と *grass* は単なる空間における隣接や接触の関係ではなく、全体-部分関係にある。つまり、代名詞 *them* からも明らかのように、その草はズボンについた汚れであり、地面に生えている草がズボンの近くに存在するとは解釈されない。この

ように前置詞句で場所を特定した have 構文の目的語は、主語の付着物、付属物、汚れなどとして解釈されやすいことから、この構文は、(10) のような全体-部分関係を持つ have 構文からの意味拡張として捉えることができる。同様に、(12) から (14) でも、目的語はそれぞれ、建物の周辺のもの (*fence*)、ステッカー類 (*Mr. Brook's name*)、テーブルセッティング (*fresh flowers and candles*) を表しており、主語に対する〈部分〉に準じた関係を持つと解釈することができる。¹¹ このことは、(1) や (3) にも当てはまることから、have 構文はこの点でもハ-ガ構文に対応する特徴を備えていると言える。

(12) The house has *a fence* around it.

(13) The door has *Mr. Brook's name* on it, you can't miss it.

(14) Each table has *fresh flowers and candles* on it.

以上、本節では、前置詞句を伴う have の構文には、日本語のハ-ガ構文に見られる2つのトピック構文の特徴があることを示した。¹²

3.2. 参照点構造から捉えた have 構文の解釈的意味

Li and Thompson (1976) は主語とトピックの相違点の一つ目として、「トピックの重要な特徴は、文の動詞と選択関係にある必要がない、つまり述部の構成要素の項である必要はない」(p. 461) と述べている。英語の have 構文は、日本語のトピック構文と類似性を持つものではあるとしても、構文的には他動詞文であり、その観点からは、本来主語と動詞 have の間には選択関係があると言える。本節では、英語の have 構文では、この動詞 have の意味が希薄化するにしたがって、主語がトピックとして働くことを示す。特にここでは、この点について、Langacker (1995, 1999, 2006, 2008, 2009) の参照点構造を使ってその認知メカニズムを示す。

Langacker による認知文法では、事態の中で最も際立つ参加者はトラジェクター (trajector=tr)、2 番目に際立つ参加者はランドマーク (landmark=lm) と呼ばれ、他動詞文では主語と目的語がそれらに当たる。Langacker (2009: 102-8) は、have を使った所有構

¹¹ 〈汚れ〉には、他に *scratches, haze, cloud, soil* などがある。また〈部分〉に準じた解釈がされるものに、建物周辺の物 (*moat, wall, garden, gate, path, yard* など)、テーブルセッティング (*silverware, a bottle of wine, glasses* など) がある。

¹² 前置詞句を伴う have 構文と、ハ-ガ構文との対応が見られる例には以下のようなものがある。(i) は主語 *our house* に照応する *it* を持つ have 構文である。(ii) の日本語の実例とほぼ対応するであろう。

(i) *Our house has mountains around it.* (Davis, Donald. 1994.)

(ii) うちは周りに山があるので、スズメバチがくるんです。

文では、トラジェクターからランドマークに対する身体的コントロール（例えば手で何かを持つこと）が段階的に弱まるという意味変化があり、その結果、haveの意味の希薄化が起こり、ついには意味が透明になるという。例えば、(15)では、歯ブラシを使用中であればI (tr)の*electric toothbrush* (lm)に対する身体的コントロールは強い。また、それを使用していない場合でも、常にその権利を行使できる状態にあることから、ランドマークに対する身体的コントロールはやや弱まるが、依然として存在する。

(15) I have an electric toothbrush. (Langacker 2009: 104)

さらに、コントロールは身体的であるとは限らず、社会的なもの（例 *Jones has a very good job.*）から、経験的な性質のもの（例 *My brother has frequent headaches.*）にも段階的に広がっていく。しかし、have構文におけるこのような意味の希薄化だけで、そのトピック構文化への拡張を十分に説明することはできない。この構文の主語と目的語の間には、希薄化とは無関係に参照点関係が常にスキーマとして内在しているからである（Langacker 2009: 104）。

参照点は概念化者である話者や聞き手が利用するもので、これを参照することでターゲットである目的語を容易に特定できるようにするという認知的な方略である。Have構文では、主語が参照点となることでトピックとして機能し、そのトピック構文化は、動詞haveの段階的な意味の希薄化によって内在するスキーマとしての参照点構造が顕在化することで起こるとされる。つまり、(15)の例では内在する参照点関係は顕著ではないが、主語（所有者）による能動的なコントロールが弱くなることで、haveを使った所有構文の参照点構造が顕在化するとされる。例えば、(16)や(17)においては、主語は動作主ではなく目的語の対象物を見つけるための空間的な参照点になるという。この主語は最も周辺の〈経験者〉に位置付けられ、(18)では、主語は能動的なコントロールを失ってさらに受動的になり、参照点機能のみを有するようになる（Ibid., p. 104）。

(16) We have a lot of earthquakes in California.¹³

(17) Sherridan has brown eyes.

(18) Their house has four bedrooms.

(Langacker 2009: 104)

¹³ Langacker (2009: 104) は主語 *we* を場所の参照点としているが、この文では場所を特定する要素としての *in California* が別にあるため、余剰的となる。本節での主張に沿ってこれを説明すると、ここでは、総称の *we* がグラウンド（談話の場）と「カリフォルニアで地震が多いこと」という命題的情報とを結び付けるために使われていて、*we* は、外界における「場所の参照点」から、テキストの参照点（つまりトピック）としての読みへとさらに意味変化していると言える。

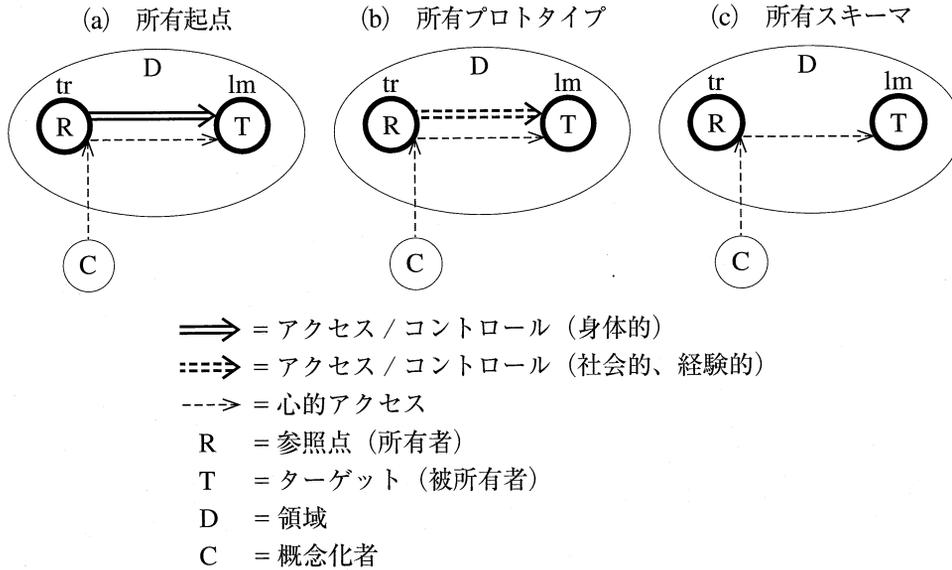


図1 所有構文の参照点構造 (Langacker 2006: 26, 2009: 104)

図1は have を使った所有構文の主語と目的語の参照点関係を示している。(a)はこの構文の原義、(b)はプロトタイプ、(c)はスキーマを表す。(a)は(15)の表す意味が、歯ブラシを使用中である場合に相当し、「手で持つ」(*hold*)のようなコントロールの強い意味構造を示す。一方、(b)は歯ブラシを使用していない場合に相当する所有のプロトタイプ的な構造である (Langacker 2009: 104)。図1の(c)においても主語-述語構造は維持されている。しかし意味的にはトラジェクターからランドマークへのコントロールが無くなり、両者の関連付けは概念化者(C)が心的に行うだけになる。つまりRからTへの話者による関連付けである。このため、図1の(a)、(b)では事態から離れて自由に主語を選択することはできない。例えば(17)では事態に反して *Sherridan* を *John* などに置換することはできない。一方、図1の(c)においては、(19)、(20)から分かるとおり、概念化者が、聞き手や状況に応じて最も適切な参照点になるものを、主語(R)として選ぶ。

(19) *The watch has a scratch on the screen.*

(20) *The screen has a scratch on it.*

(answers.yahoo.com, as of 2009-09)

次に、明示的トピック構造を持つ文である(21)を例にその特徴を検討する。

(21) *Your uncle, he really should get married.*

(Langacker 2009: 48)

図2は(21)の参照点構造を示す。この図から分かるように、(21)は1つの部分ではな

く、参照点 (R) とそのターゲット (T) (proposition) の2つの部分からなる構造を持つ。¹⁴ この場合、*your uncle* は参照点であり、後続の命題の中で使われている代名詞 (*he*) はターゲット内に現れ、細い点線が示すように *your uncle* と対応している。

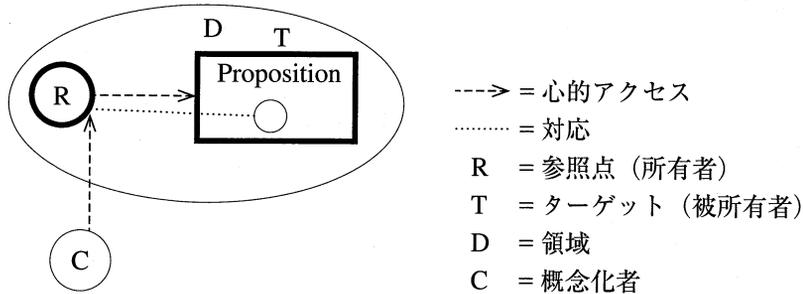


図2 トピック構文の参照点構造 (2008: 513, 2009: 48)

上の (21) の文は2つの部分からなり、後半は命題 (節) から構成されターゲットとして解釈される。一方 *have* 構文は統語形式の上では1つの部分からなり、(21) の節に当たる部分はないが、その名詞句の意味は命題の内容を表すと分析することができる。先ずこの点について、*have* を使った別の構文 (22) で検討する。

(22) Tom had *his dog* walk around the flat.

(22) は1つの部分から構成されているが、その主語 *Tom* は、「彼の犬が歩く」という事態 (プロセス) を引き起こす使役行為の動作主として、*have* はその使役を表す動詞として使われている。つまり、ここで、*have* に続く部分はその事態の命題を表していると解釈することができる。これを (1)、(3) に当てはめると、名詞句はそれぞれ、「三冊の本が机の上にある」 (*three books are on it*)、「汚れが椅子についている」 (*a stain is on it*) のような命題を表していると解釈することができる。次に、Langacker (2009: 194) は、トピック化の特徴として、ターゲットがモノではなく節やプロセスの場合に起こりやすいと述べているが、同じような特徴をもつ (22) は、(21) とは違いトピック化の解釈はできない。それは、(22) では主語による目的語に対するコントロールが強く、(19)、(20) と違い、参照点としての他の主語に置き換えができないからである。ここで検討している (1)、(3) のような *have* 構文にも同じように、その主語からのそのような強いコントロールがなく、(18) のような参照点機能のみを有すると解釈されると考えられる。

ここで、(22) と、(1) や (3) のような *have* 構文との違いを、図3に示す参照点構造を

¹⁴ 属性叙述文がトピック・コメント構造を取るとする益岡 (2004: 4) も、その構造的特徴を図2で示すような参照点とターゲットの関係で捉えている (2.1 参照)。

使って説明する。図3 (a) は (22) を図示したもので、主語-述語構造におけるトラジェクターからランドマークへのコントロールが強くなる方向へ変化した構文の意味を表す。一方、図3 (b) は (1) や (3) を図示したもので、参照点関係が顕著になる方向へ意味変化した構文の意味である。この図では、(図2と異なり) 外側の四角は、全体が形式的には一つの節であることを示す。ここでは、図2同様、他動詞文であっても have の意味が希薄化し、トピック構文に近い意味構造を持つことを示す。また、前置詞句内の代名詞はターゲット内にある命題内の構成要素に当たり、細い点線はそれと参照点との対応付けを示している。

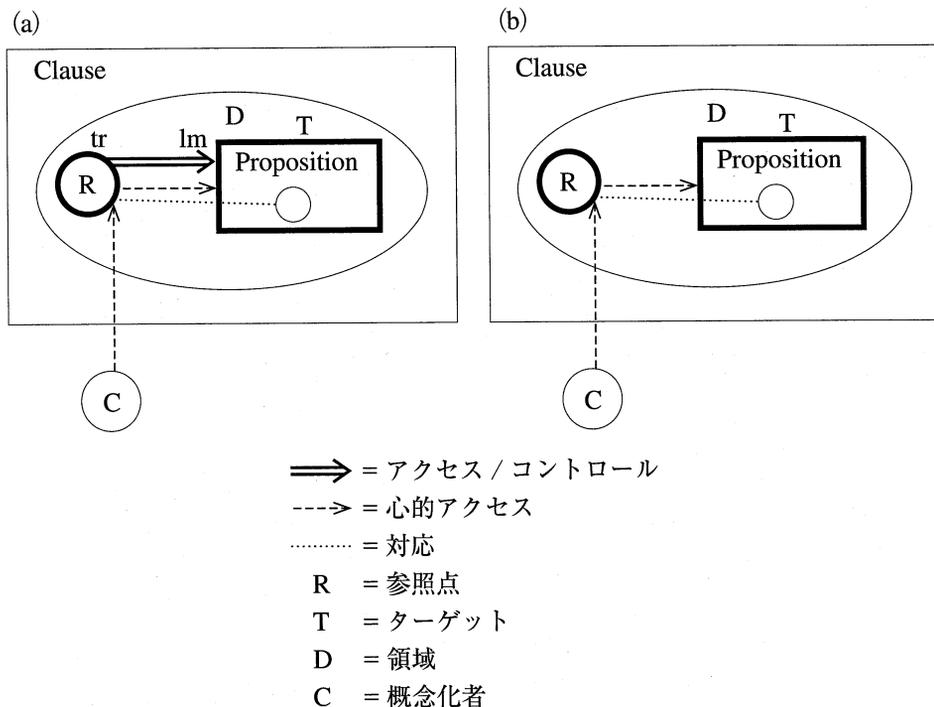


図3 主語-述語構造の have 構文とトピック構文的 have 構文の参照点構造

Have 構文の主語の参照点化は、ひとつには動詞 have の多義性にその要因を求めることができる。他動性の高い (つまり、コントロールの強い) have の意味は、「摂取」「招待」「購入」などで、動作主の意志によって、被動作主を動作主方向へ移動させるというスキーマを持っている。これに対し、状態性の高い (つまり、コントロールの弱い) have の意味は、「付着状態」「包含状態」「全体-部分」など状態の叙述である。後者の場合に have の意味の希薄化によって、参照点関係が顕著になり、トピック構文的な解釈がされやすくなる。

以上、ここでは前置詞句を伴う have 構文のトピック構文的な解釈を参照点能力の点から考察した。

3.3. 談話・テキストのトピックと have 構文の解釈

参照点を利用しているのは概念化者に同定される話者や聞き手であり、参照点の効果的な選択は、談話のテキスト構成に反映するものと思われる。ここまでは、have 構文がトピック構文的な解釈を受ける場合について、単独の文の中で分析してきたが、本節では have 構文がトピック構文的に解釈される文脈的要因を考察する。¹⁵

この観点からの検討を進めるに当たって、まず、談話における上位トピックと下位トピックについて述べる。次の二つの文を比較してみよう。(23) は、火事で室内に閉じ込められた人物 *he* に関する記事で、主語に有生の経験者を選択している。これに対し、(24) は有生の経験者を主語として選択せず (*his eyes*)、その結果、文の後半は、本稿で検討している have 構文になっている。

(23) “*He must have had smoke in his eyes, because he couldn’t see to unlock the door.*”
(St. Petersburg Times Dec. 1, 1991)

(24) *His hair was tousled and his eyes had a wild gleam in them.* (Lodge 1992: 50)

いずれも、*he* が指す人物の一時的な状態を叙述しているが、(23) は事象叙述的な意味を、(24) は属性叙述的な意味を表すと言えるだろう。さらに、(24) では *his* で表現される人物 (*he*) が、トピックとして暗示的に認められ、*his hair* や *his eyes* は、その下位のトピックとなっていると言える。言い換えれば、(24) の例では、叙述の対象が have 構文を超え、上位のトピックである人物 (*he*) に向かっていると見える。このような表現は日本語においても見られる。日本語では、下の例のように、特に談話の場や文脈から明らかでない場合、トピックが「文内」に明示されないことが多い。

(25) 海苔の張っ付いてるのは、中に塩ジャケが入ってるわ。

(新潮 CD 曾野綾子『太郎物語』)

(25) は「お握り」についての叙述で、そのことは、明示的には表現されていないが (26) のような文脈において明らかになる。この場合、(下線部の)「海苔の張っ付いてるのは」は、「ゴマのは」と同様、「お握り」という前提となるトピックの下位のトピックとして、使われていることが分かる。

(26) アルミホイルの包みは、子供の枕くらいあった。それを開けると、まさに握りこぶしくらいのお握りが八つ入っていた。「ゴマのはね、ゴマだけ。海苔の張っ付いてるのは、中に塩ジャケが入ってるわ。それから何となくうす汚れ

¹⁵ このトピックは、益岡 (2004: 5) が「文内主題」と対比させ「談話・テキスト主題」と呼ぶものである。ここでは、そのような特徴を持つ談話・テキストにおける have 構文の主語の働きを見る。

て見えるのは、梅干しとオカカをお醤油で捏ねたのをまぶしてあるの」

(新潮 CD 曾野綾子『太郎物語』)

これは日本語のトピック-コメント構造の表れと考えられるが、Sp 言語の英語でも (27) が (28) のように表されることがある。

(27) *My car has a scratch on the rear bumper above the number plate.*

(28) *The rear bumper has a scratch above the number plate.*

(2006-12 現在: www.ebay.com/)

(28) は車のオークションについてのテキストで、その傷 (*scratch*) の影響を受ける対象は、うしろのバンパー (*the rear bumper*) より上位のトピックである出品者の車 (*My car*) である。したがって、(28) は、(25) に相当するものと考えられる。

トピック自体が持つ上下関係は、Taylor (1996: 209-218) によっても論じられている。Taylor は、Chafe (1987: 25) の論じた談話におけるトピックの階層と意識の活性化の程度との関係を踏まえ、英語の [X's Y] のタイプの所有格構造について、X はトピックとして働くことがあり、トピックは参照点関係の連鎖により階層的な構造を作るとしている。また、多くのテキストでは、タイトルやヘッドラインにはテキスト全体をカバーする一般的なトピックが現れる。多くの場合、それは、章や節の小見出し、段落、文などの順に、より局所的なトピックに絞られていく。

次に、have 構文の持つトピック構文的な解釈が、実際の談話のテキストにおいてどのようにして、上位のトピックに関連付けられているかを以下に示す。(29) は、*Daily Grill* というカリフォルニア州のサンタモニカにあるレストランについてのレビューである。

(29) I found *Daily Grill* to be a low key, casual restaurant. *The music, dim lights, and dark wood gave it an upscale feeling. Booths, circular seating, and tables were all decorated with leather looking seats and dark wood trim. Each table had a candle on it.*

(Jul 04 '07: www1.epinions.com)

まず、ここでは、*Daily Grill* がテキスト全体をカバーするトピックとなり、次に店の内装に関する品目とその下位のトピックとなっている (2 番目と、3 番目の文)。この内装品の 1 つが *tables* であり、最後の have 構文に現れる *each table* はこれを同定している。この *each table* は文内のトピックとして機能し、その内容は *it* を含む前置詞句によって特定される名詞句によって特徴付けられている。しかし、それと同時に、この主語は、階層的構造を成す上位のトピックに関連付けられている。つまり、イタリック体で示した have 構文がこのテキストの中で果たす機能は、単に、ろうそくがテーブルの上に存在するという事を伝えることではなく、*Daily Grill* 店内にある各テーブルの様子を叙述することに

よって、レストラン自体の特徴を伝えることなのである。換言すれば、have 構文を使ったテーブルについてのこの表現は、各テーブルがレストランの「構成要素」の一部と理解される文脈内にあって、それよりも上位のトピックであるレストランの特徴を描写していることになるといえる。従って、この文脈において、この have 構文がその読者に与えるこのような意味は *There was a candle on each table* などの存在文では表せないと言える。

以上、ここでは、have 構文の主語が一文内のトピックとしてのみ機能するのではなく、談話レベルのトピックと連動したふるまいを見せることを示した。

4. おわりに

That table has three books on it のような前置詞句を伴う have 構文は場所を表す前置詞句を必須とし、主語と同一指示の代名詞が前置詞句内に生じるため、主語が代名詞かのいずれかが余剰項ではないかと指摘されてきた。また、それは、意味的にも have 構文を利用する動機が最も弱く、存在文で表示できる概念ではないかと考えられることが多い。本稿では、この構文の特徴を、類型論、意味拡張、構文拡張、参照点構造の観点から考察した。

その考察に当たって、まず2節では、叙述の基本的構文および、英語の have を用いた構文自体の持ついくつかの一般的な特徴を先行研究に照らして検討した。はじめに、主語-述語構造とトピック-コメント構造という2つの叙述の型を持つ言語では一方が基本的な型からの「派生」表現として捉えることができることを示した。次に、have 構文は日本語のトピック構文に対応するほか、その意味は、所有関係を行為スキーマからの文法化によって生まれた拡張的なものとして捉えることができることを示した。

以上の考察をもとに、3節では、前置詞句を伴う have 構文がトピック構文の特徴を持つという主張を次の3つの点からさらに詳しく論じた。まず一つは、この構文は、日本語のトピック構文との対応で明らかにされた have 構文の持つ2つの特徴を持つという点である。それらは、have 構文の目的語に生じる名詞句の主名詞が他の要素である前置詞句によって修飾されていることと、この構文も主語と目的語との間に全体-部分の関係を持つことである。2つ目の点は、目的語位置に生じる have 構文の名詞句は、明示的トピック構文に見られるように、トピックである主語を参照点とする命題として解釈できることである。3つ目は、前置詞句を伴う have 構文は、一つの文内のトピックというだけではなく、談話文脈における階層的トピックに関係しているという点である。この点については、have 構文が実際にトピック構文として有効に使われる例を談話のデータを使って示した。

今まで、前置詞句を伴うこの have 構文の構造は、動詞 have の項構造では説明できないとされていたが、本論ではこの構造がトピック構文という情報構造の現れであるという観

点から説明できること明らかにした。また、余剰的に見える前置詞句の代名詞が、これと同一指示の主語とともにトピック構文を構成する要素になるということを示すことで、なぜそれが余剰的ではなく必要であるのかも明らかにすることができた。この研究の延長には、話し言葉における have 構文の使用の実態を同じアプローチで検証するという重要な課題がある。参照点現象には人間の認知能力であるという側面と、言語構造に反映された参照点構造という側面とがある。多重に構成される参照点を駆使するのは話者と聞き手であることを考えると、この種の have 構文は口頭の対話でより多く使われることが予想される。¹⁶

参考文献

- Chafe, Wallace. 1987. "Cognitive Constraints on Information Flow." In Russell Tomlin (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession. Cognitive Sources, Forces and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray. 2002. *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Kumashiro, Toshiyuki and Ronald W. Langacker. 2003. "Double-subject and Complex-predicate Constructions." *Cognitive Linguistics* 14: 1, 1-45.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4: 1, 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Possession and Possessive Constructions." In John R. Taylor and Robert E. MacLaury (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2006. "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes." In Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigation in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1976. "Subject and Topic: A New Typology of

¹⁶ 特に会話においては、参照点としてのトピックは話者によって主体的に選ばれる傾向にあることが予想される。例えば、ゲームの攻略法を伝えるある発話場面で、*You have two doors to choose. The first one—it has a hole behind it.* (選択できる2つのドアがある。1つ目のもの、その後ろには(落とし)穴がある)という表現が使われている。Have 構文の主語と目的語の関係は、文脈がない場合は全体-部分関係に依存するが、この発話の場合、目的語「落とし穴」(*a hole*)の主語「ドア」はその先行文脈環境に依存して話者によって選ばれる。

- Language.” In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457–489. New York: Academic Press.
- 益岡隆志. 2004. 「日本語の主題」、益岡隆志 (編) 『主題の対照』、東京：くろしお出版.
- 中右実. 1998. 「空間と存在の構図」、中右実・西村義樹 『構文と事象構造』、日英語比較選書 (5)、東京：研究社.
- 西光義弘. 2004. 「英語のトピック構文」、益岡隆志 (編) 『主題の対照』、東京：くろしお出版.
- 西村義樹. 2004. 「主語をめぐる文法と意味——認知文法の観点から——」、尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 6 文法 II』、279–97、東京：朝倉書店.
- Taylor, John R. 1996. *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Clarendon Press.

参考辞書・資料図書等

- COBUILD 英英辞典 改訂第4版. (Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary. 4th ed.), Harper Collins Publishers. 2003.
- OED Online <<http://dictionary.oed.com/>> Oxford University Press.

例文出典

- Davis, Donald. 1994. *Thirteen Miles from Suncrest*. August House Pub Inc.
- Lodge, David. 1992. *Paradise News*. Thorndike Press.
- 『新潮文庫の100冊』CD-ROM 1995. 東京：新潮社.